

# 『史記』經濟篇の研究

鹿 謂 慧  
桑 田 幸 三

---

## I 「貨殖列伝」と「平準書」の関係について

鹿 謂 慧 著  
桑田幸三 訳

『史記』130篇<sup>1)</sup>は、それぞれ独立しているが、同時にそれらは一体となって完結した史学体系を構成している。それらの中で「貨殖列伝」と「平準書」（以下、それぞれを〈伝〉および〈書〉と略称する。）とは、『史記』のこの特徴を最もよく反映している。

〈伝〉と〈書〉の扱う所は、共に經濟方面の内容であり、『史記』中の姉妹篇とも称すべく、緊密な連携をたもっている。同時に、それぞれ固有の特徴に応じ、異なった視点から、司馬遷の一家言たる經濟思想の観点を反映している。〈伝〉と〈書〉の相互関係を分析・研究することは、司馬遷の經濟思想を一層よく理解・把握する上で助けとなるばかりでなく、『史記』の他の分野の研究にも有益であると思われる。

〈伝〉と〈書〉とは他篇とは異なり、ともに經濟の專著であるが、司馬遷はどうして一つのものを二つに分けたのであろうか？ 両者の間には、どのような連携と相違があるのだろうか？ われわれは「貨殖」と「平準」両語の意義から窺う事としよう。

## 「貨殖」と「平準」の意義

「貨殖」の2字は最も古くは『論語』に見られる<sup>2)</sup>。貨は財貨、殖は生殖増加の意味であり、「貨殖」は財貨を経営し利潤を取得する商業活動を意味していた。その後、「貨殖」の意義は拡大せられ、商業あるいは手工業を指し、また、商人や手工業者をも指すようになった。

司馬遷の「貨殖列伝」における「貨殖」が、多様な意義を含んでいることは明らかである。〈伝〉に登場する人物には、商人があり、手工業者もある。

〈伝〉は商人や手工業者の経済活動の伝記なのである。世間に恥ずかしくない商人や手工業者の伝記が史書に載せられるとは、中国史上まさに前代未聞の事であり、そのことが、司馬遷の非凡な胆力と識見、かれ独特の史観を現すものと言えよう。

「平準」は、一種の経済政策であり、また、一種の官職の名称である。それは、前漢の武帝時代の大農令<sup>3)</sup>桑弘羊によって創設された。桑弘羊は、「以商制商」政策を推進し官営商業の発展を大いに促進した。ただし、各官営商業単位の不協調、各単位の市販による相互の競争により、一派の商人が口実を設けて物価を吊上げた。この物価を安定させるために、太初元年（BC104）に、桑弘羊は大農の機構を拡充し、その下部に「平準令」を設置し、物価安定策を管掌させた。各地の運輸官が都（長安）に輸送した貨物は、平準令によって統一的に掌握・移動される。平準令は高価格時に売却し、低価格時に購入する方式を採用し、これによって市場における物価の安定を確保する。平準の具体的内容について、司馬遷は〈書〉の中で詳細な説明をおこなっている<sup>4)</sup>。

平準は当時行われていた「均輸」<sup>5)</sup>と同様に、武帝時代の重要な経済政策であり、平準・均輸の官は、この政策を管掌した重要な官僚である。これらの経済政策と財政官僚とは、武帝時代の経済の特徴を最もよく反映する、典型的な事象であると言えよう。平準政策の実施が開始された時点において、

『史記』の編纂は既に始まっていた。司馬遷は「平準」の2字を以て、『史記』の、現代経済発展篇のテーマとしたのである。

「貨殖」と「平準」の意味の相違は〈伝〉と〈書〉との特徴を決定づける。それらに共通する経済なる属性はまた、両者に共通性を与える。以下、われわれは〈伝〉と〈書〉の相違について考察しよう。

### 貨殖伝と平準書の比較

- 1 経済事象を採り上げる上で、〈書〉は現代を主とする。前漢政権の成立から武帝時代に至る百余年の経済発展の状況が、その中でも武帝時代が主として記載されている。〈書〉では、紙幅の絶対部分が「今上即位」以後の記事によって占められ、高祖・文帝・景帝等の時代は極くあっさり描写されている。〈書〉は一部の現代経済史と称すべく、前漢の前・中期の経済発展が読者の眼前に明瞭に展開されている。

〈伝〉においては、そうではない。〈伝〉に登場する経済人像および経済事象には、前漢時代のものも見られるが、春秋・戦国時代のものも見受けられる。古い時代のものの方が現代のものよりも多い。<sup>6)</sup>

例えば、子貢は春秋時代の人物である。かれは、もと孔子の学生であったが、財貨を蓄積し、曹・魯の地方に販路を広げた。他出には四頭建ての馬車や騎馬隊を用い、礼物の束帛をやりとりして諸侯と交遊したが、至る所の国君が庭に降り立ち、対等の礼を行ったという。

宛の孔氏は漢代の経済人物である。かれは、冶鉄を生業として大いに鼓鑄（鉄のふきわけ）を行い、また灌漑・飼育用の池沼を大量に経営し、車騎を連ねて諸侯と交遊し、「遊閑公子のプレゼント商法」と喧伝された。その利益は莫大で、けちくさい商人よりも勝っていた。家、富を致すこと黄金数千斤。南陽の商人は皆、孔氏の悠揚な商法を範としたという。<sup>7)</sup>

〈伝〉にいわゆる“漢興りて以来、当世千里のうち、賢人の富める所以のもの”はまだまだ少なくないが、これら当世人の中で、大多数は武帝以前の人であり、しかも、皆、影響力の大きい貨殖家である。武帝初期は、商人の勢力が急激に発展した時期であるが、〈伝〉の中には影響力の大きい人物は見当らない。一寸言及しておく程度の人物ばかりである。

- 2 〈伝〉は商人・手工業者のための伝記であり、賞賛を旨とする。中国の封建社会において、商人は白眼視される存在であり、商はとかく奸と一緒にされ、世人の目には商人は皆悪賢い者と映っていた。手工業者に至っては、彼等の仕事は奇技淫巧——奇怪な技巧ぐらゐに蔑視されていた。司馬遷はこれに反し、〈伝〉の中で、商人・手工業者に対し熱情をこめて賞賛し、非常に高い評価を与え、“当代の賢人”とまで言っている。

〈書〉は批判を以て手段とする。〈書〉の批判の対象は武帝であり、桑弘羊である。桑弘羊は武帝時代の著名な財政の専門家である。武帝は財政困難の打開の為、ならびに急激に台頭してきた商人勢力に打撃を与える為に、従来の、「商人は仕官するを得ず」という、伝統的な慣例を破って、商人出身の桑弘羊や、塩商人の東郭咸陽や、冶鉄商の孔僅らを財政官僚に起用したのである。これらの商人出身の官僚達は、第一に利潤最大の塩・鉄・酒の製造業を国有化し、塩・鉄の国営と酒の専売を実施した。武帝は、“孔僅・東郭咸陽をして、伝（駅伝の車）に乗って天下の塩・鉄を挙り行ない、官府を作らしめた”<sup>7)</sup>。商人や手工業者の脱税に対しては、孔僅・東郭咸陽・桑弘羊は無慈悲な打撃を加えた。桑弘羊は、大農令に任ぜられた後は、さらに一步進めて国営商業を発展させ、私営商業を抑制した。国営商業は既に政治的な後盾があり、加えて経済的な実力を備え持っていたので、つぎつぎと、私営商業の競争をうち退けた。桑弘羊の「商を以て商を制する」政策に対して、司馬遷は強い不満を表明している。〈書〉の中で、司馬遷はかつて桑弘羊の以商制商政策の実施結果に対し肯定的であったけれども、それにも増して、この種の経済政策に対しては批判的である。大多数の商人や手工業者が抑制を受けたことに対しては、同情の意を表している。かれの真意は鮮明に対比し得る。

- 3 〈伝〉の記述は人を主とし、商人や手工業者の為に伝記を作ることへ傾倒している。『史記』のどの一篇にも、〈伝〉にみられる様なこれ程多数の人物が登場するものは他には見当らない。〈伝〉の全文4,700余字のうちに、30余人の貨殖家が登場する。その一人一人が生生躍動し、永い生命力を持っ

ている。かの越王勾践の大臣であり、美女西施の愛人でもあった范蠡が、ついにはトップの指折りの大商人になったとは、誰が想像し得たろうか。かれは、功成り身退いて後、定陶（山東省）において経営に従事し、財貨を蓄積し時期に従って利を追い、よく人を選んで時を待ち、19年の間に3度も千金の巨富を築き、世人の尊敬を得て陶の朱公と称された。また、かの巴郡の寡婦である清は、祖先以来の丹砂鉾山を継承し、経営宜しきを得て“能く其の業をまもり、財を用いて自ら衛り、侵犯せらるることなし”<sup>8)</sup>という。〈伝〉の中にあっては、一人一人の貨殖家が意気昂然として、もはや他人から白眼視される奸商や奇技淫巧の製造業者ではなくて、まさに賢人なのであり、世人の致富の模範なのである。〈伝〉の中で、司馬遷はまた、詳細に当時の経済地理的な状況を記載している。それらも全て貴重な資料である。

〈書〉の方は、事を記す事を主とする。〈書〉には漢朝創建から武帝期に至るまでの経済の発展と各種の経済政策の変遷が詳細に記述されている。経済政策の主要なものは、貨幣政策と抑商政策である。

貨幣政策では、前漢初年の“更に民をして錢を鑄しむ。一黄金は一斤。法を約し禁を省く。”とか、文帝期の“民をして、ほしいままに自ら錢を鑄ることを得しむ”とか、元鼎4年の“悉く郡国に禁じて錢を鑄ること無からしめ、専ら上林の三官をして鑄しむ”という様な経過を辿って、最終的に国家の専権として鑄幣権と発行権を確立したのである。

抑商政策においては、“高祖乃ち賈人をして絲（絹）を着、車に乗るを得ざらしめ、租税を重くして以て之を困辱す”にはじまり、恵帝・呂后がこの種の抑商政策を継続施行し、また、“商賈の律を緩うす。然れども市井の子孫は亦た仕官して吏となるを得ず”とした事<sup>9)</sup>等の経緯があった。武帝期に至って抑商政策は重大な転期を迎えた。則ち商人の仕官を許可し、商人の勢力を用いて商人に打撃を与え、官営商業によって私営商業を抑制する。これらの政策を概括すれば「以商制商」となる。

〈書〉の中には、多くの人物も記述されているが、それらも“事を記す”

為に役立っているのである。

4 〈伝〉と〈書〉の相違は両篇の編集目的の上にも見受けられる。

〈太史公自序〉の中で、司馬遷は〈伝〉の著作目的を次の様に説明している。

“布衣匹夫の人、政を害せず、百姓を妨げずして、取与するに時を以てして財貨を殖やす。智者もこれを採る。〈貨殖列伝〉第六十九を作る。と。

これによって見れば、司馬遷が〈伝〉を作った目的は次の二つに他ならない。

1) 世俗の偏見を直し、商賈の為に名を正す。

地主階級の経済体系の確立に伴って、統治者は一層強く抑商の重要性を感じるに至った。漢朝の皇帝は、一方では各種の措置を取って商人の経済活動を抑制しながら、他方では世論の上で、商人に対し評価を低くさせ、社会習俗墮落の罪を全て商人に帰し、その評判を悪からしめた。世人の眼中には、商人は利益のみを追及する悪賢い存在としか映らぬようになった。司馬遷の目から見ると、これは歪曲されたビジョンである。商人は白眼視されるべきでないばかりでなく、賞賛されるべきである。商人は国家に害が無く、百姓を妨げる訳でも無く、ひたすら時と相い逐うて財富を取得するのであって、同時に、人々に生活上の需要の一切を提供するのである。

2) 世人の為に、大金持ちの模範を樹立する。

司馬遷によれば、大金持ちに成りたいのは、人間の本性であって、決して商人特有の発想ではなく、人々は皆金儲けを望む。ただ、方式・方法が異なるだけである。商業を営む事は人々が富を手に入れる最上の経路である。但し、人々の中には経営の才能がなく、儲け得ないばかりでなく、元手まで失う者もある。そこで、司馬遷は商人の商業成功の経験を総括して、人々の観択・学習に供し、人々の活動を方向づけ、金儲けの目標を示したのである。“ほぼ、当世千里の中、賢人の富める所以をいい、後世をして観択するを得しめん”と彼は述べている。<sup>10)</sup>

司馬遷が〈書〉を作った目的については、やはり、〈太史公自序〉の中に次の見解が見られる。

“貨幣の循環を維持し、農商の流通を図るが、策を弄する事ともなり兼併が益々促進され、投機的な利益を争い、本業を去って末に趨る。そこで平準書を作り事態の変化を観察する。”と。

司馬遷がここで言うところの“事態の変化”の中心は、前漢時代の經濟の変動を指している。かれは、前漢の時系列的な經濟政策の変化の叙述を通じて、それらの得失を指摘し、統治者がこれを参考として、その社會經濟の發展に不適應な政策を不斷に調整し得るように希望しているのである。同時にわれわれは、司馬遷が前漢經濟の変遷について決して消極的に觀察するのではなく、かれ自身の鮮明な觀點を持っていることを見出すのである。〈書〉の批判の矛先の向かう所は、武帝・桑弘羊の一系列の貨幣政策および抑商政策である。“貨幣の循環を維持し、農商の流通を図る”べくして展開された前漢の貨幣形式や貨幣政策は、農商の流通を利するものではなかった。武帝の「以商制商」政策に対して、司馬遷はさらに鋭い批判を向ける。官営商業を發展させることは、“投機的な利益を争い、本業を去って末に趨るもの”である。末業は國家の從事すべき事業ではなく、商人の手に歸すべきである。と。

以上、われわれは〈伝〉と〈書〉の相違について分析を進めてきた。その區別の分析を通じて、自ら両者の連携を観察してきた。〈伝〉と〈書〉の相違そのものが連携を反映し、同様に、連携がまた區別を反映する。両者が一体化する所に、一種の共通的な經濟視点を反映する。すなわち、「農商併重反抑商」の思想である。

中国において支配的な地位を占めてきた經濟思想は、伝統的な重農抑商思想である。この種の經濟觀點は、春秋戦國の時期には提起され、前漢時代にその支配的地位を確立した。しかしながら、この時点で司馬遷の反伝統的な農商併重の反抑商思想を産み出した訳である。自己のこのような思想觀點について、司馬遷はちがった方式で説明を行っている。〈伝〉の中では正面か

ら論じる方式を採っているが、〈書〉の中では反面批判の方式で説明をしている。〈伝〉においては我々は司馬遷が国民経済を、農・工・商・虞<sup>11)</sup>の四大部門に分けているのを見出す。人間の生活に必要な一切の物は、すべてこれらの四つの経済部門によって提供される。“農をまてて之を食し、虞して之を出し、工して之を成し、商して之を通じる”のである。これら四つの環節は實際上、生産と流通の二つのプロセスから成る。農・工・虞は生産部門であり、商は流通部門である。農・工・虞の発展に伴って、更に多くの人が商業活動に従事することが必要とされる。

もし、そうでなければ、多くの商品が流通の術を失い、人々は日常生活で被服・飲食し、生者を養い死者を弔う為の需要を満足し難くなる。そうなれば、農・工・虞の発展も有り得ないし、商業の発展もその源泉を失う事となる。要するに、国民経済の中で、農・工・商・虞の四者はどれ一つ欠けてもいけない。まさに、“農、出さざれば則ち其の食乏しく、工出さざれば則ち其の事乏しく、商出さざれば則ち三宝絶え、虞出さざれば則ち財匱少す”るのである。そこで、司馬遷は抑商政策に強く反対し、農・商の両立発展を主張したのである。国家の立場で言えば、農民の利益を考慮するからには商人の利益についても配慮すべきである。農の為に商を苦しめてもいけないし、商の為に農を傷つけてもいけない。双方に心を配り、農・末ともに利する。

“農末ともに利し、米価を調節し、関市を乏しからざらしめるのは治国の正道なり”と言われる。〈伝〉の中で司馬遷は更に一步進めて、農・商の間の関係を分析して次のように言う。“農病めば則ち草辟けず、末病めば則ち財出でず”と。

司馬遷は、農・商の両立発展を主張するとともに、早急な致富の観点から、かれは旗幟鮮明に「経商致富」を主張する。“それ、貧をもって富を求めるに、農は工に如かず、工は商に如かず。繡文を刺すは市門に倚るに如かず。これ、末業は貧者の資たるを言う也”<sup>12)</sup>と。勿論、司馬遷は決して農業に従事しての致富に反対するものではない。かれは、本富上となし末富之に次ぐことを認めている。かれが強く反対しているのは、正当でない手段で金儲けする奸



富なのである。

司馬遷の農商兩立、反抑商の思想は〈書〉の中で更に一步進めた展開を見せている。司馬遷は事実を挙げて工商の病ましむべからざる所以を論証する。武帝・桑弘羊の採用した経済政策はすべて工商を病ましめる政策であり、私営の工商業に重大な打撃を与えた。それで、〈書〉の中で司馬遷は、桑弘羊を興利之臣とそしり、卜式の口を借りて痛罵するという。“役人は租を食し税を衣るべきのみ。今、弘羊は吏をして市に坐し店に列して物を売り利を求めしむ。弘羊を煮れば、天乃ち雨ふらん”と。司馬遷は、この卜式の言葉でもって〈書〉の結語としているが、桑弘羊に対する極大の不満と、「以商制商」政策に対する最終的な否定を表現したもの、というべきであろう。この種の政策に対する否定はすなわち、農商兩立、反抑商思想の肯定と見てよい。かくして、もし、〈伝〉は正面から自己の経済観点を説明したものとすれば、〈書〉は則ち反面から自己の経済観点に対して論証し肯定したものと言える。之に反し、それも同様であるが、〈伝〉と〈書〉とは相互に表裏をなし、相互に補完し、かの農商兩立の反抑商思想の観点を弁駁の余地のない不敗の地位に置いたものと言える。

〈伝〉と〈書〉のこのような相互関係については中国古代の文人達もすでに看取していた。ただ、かれらがこの種の相互関係を分析研究する出発点は違っていた。『史記』の研究の中で封建文人のある者は、班固に反駁する為に、司馬遷が貨殖を重んじなかった事を証明しようとして、〈伝〉と〈書〉の相互関係について文章をものした。たとえば、明代の陳仁錫の、“〈平準〉と〈貨殖〉は相い表裏す”の文の如きはこれである。当時、武帝が興利を好んだので、遷が〈平準〉・〈貨殖〉を作った。皆、諷刺が多い。とする。

趙訪は、〈平準書〉は人臣の横斂して人主の欲を助けるをそしるものとし、〈貨殖列伝〉は人主が貨を好み、四方をして皆その旧俗を変じて利に趨らしむるをそしるものとする<sup>13)</sup>。それゆえ、二文は互いに参照すべきであって、〈伝〉は〈書〉の注脚である。たとえば、〈伝〉に述べられた“当世の賢人”は、すなわち〈書〉にいう“不軌逐利之民”に他ならない。〈伝〉の中の“一人

一事”は〈書〉と密接な関係を持っていない者はない。すべて、〈書〉への説明と補充なのである。と。

これらの封建文人たちは、〈書〉と〈伝〉の互いに表裏をなす相互関係について、比較的正確に認識しているとはいえ、“諱言利”的な偏見は、また、かれらをして司馬遷の反抑商思想を扼殺させることとなった。

#### 注

- 1) 『史記』は司馬遷により、B. C. 108～B. C. 84のころ編纂された。全巻130篇は、①本紀12篇、②表10篇、③書8篇、④世家30篇、⑤列伝70篇で構成される。「貨殖列伝」は⑤列伝に、「平準書」は③書に属している。

参照 岩波文庫『史記平準書・漢書食貨志』1942, 加藤繁訳註

桑田幸三『中国経済思想史論』1976

1-1 『史記』の生産分業論

2-1 司馬遷の商業論

2-2 漢代の流通国営論

4-1 桑弘羊の専売論

桑田幸三著『中国経済思想史論』沈佩林・葉坦・孫新訳, 朱家楨・葉坦校審, 北京大学出版社出版, 1991

- 2) 『論語』先進。賜不受命, 而貨殖焉

- 3) 大農は大司農に同じ。財政主務官庁である。

- 11) 虞グ, 諸橋轍次『大漢和辞典』⑩古の官名。山沢を司る官名。〔書、舜典〕汝作朕虞。〔伝〕虞, 掌山沢之官。

おおむね現代の林業・水産業・鉱業に当たる。

- 1) 3) 4) 5) 7) 9) 史記, 平準書

- 2) 6) 8) 10) 11) 史記, 貨殖列伝

- 12) 史記評林

## II 市場経済と統制経済

桑田幸三

鹿氏は「貨殖伝」と「平準書」の二篇について、まず、それぞれの意義を明らかにし、ついで、両者の相違点と共通点とを解明し、最後に、全体を貫く司馬遷の経済思想として、「農商併重の反抑商」の思想に到達した。

私は、20世紀末の現時点に立って、新たな視点から『史記』のこれらの両篇を見直してみたい。

### 1 「貨殖伝」は市場経済をテーマとしている。

司馬遷は、〈伝〉の開巻第一に、経済問題を論議するに当って基本的なプリンシプルとして、老子のいわゆる小国寡民論を非現実的であるとして否定し<sup>1)</sup>、平凡な人間の物質的欲望を与件とすることを提唱する。

その上で、中国各地域の自然環境の相違にもとづく大規模な社会的分業の成立が極めて自然発生的であった事を強調する。その社会的な分業システムの中で、農・商・工・虞（林・水産・鉱）の四者は重要な構成要素であり、地域社会を豊かにし、家族単位の経済生活を裕かにする、富国富家の源泉である事を指摘する。富国の実例として、春秋時代の斉と越をあげ、富家の実例として、陶の朱公をはじめ、秦代の寡婦清に至るまで事例をあげて貨殖の範を示す。

次に前漢初期の自由化政策によって、各地域の経済が発展したこと、とりわけ政治や、地域流通の中心地にみられる、大小の都会の勃興をとりあげる。都会の経済を際立たせ、地域の経済成長の中軸となる、新興職業や新興産業の成立と発展に注目している。市場経済の目覚ましい展開のなかに、財産の蓄積、平均利潤率、所得の形成等の、定量的な分析も見受けられる。かくて秦漢時代の代表的な貨殖家＝素封家の事例をあげ、「請う、ほぼ、当世千里の中、賢人の富める所以の者をいいて、後世をして以て観覧することを得しめん。」という。

司馬遷からみれば、社会・経済の発展に従って、ものの考え方も変化すべ

きである。農業を本位とし、低い生産性を甘受し、節飲・寡欲に陥る儒家や道家の説は陳腐である。農・工・虞の生産性を高め、市場の流通を盛んにしてこそ経済の発展が期待できる。この様な意味において、彼の経済思想は近代ヨーロッパの経済学——たとえば Adam Smith の所説ときわめて類似している。

## 2 「平準書」は社会経済に対する国家の介入をテーマとする。

〈書〉の内容は当代の経済政策を主とし、とくに、貨幣政策および抑商政策に力点が置かれていること、鹿氏によって I に詳述された通りである。

〈書〉には武帝在位期間 BC141～87のほぼ前半、BC135～110にわたる四半世紀の財政収支が取扱われている。

まず、支出面について見れば、メインをなすものは軍事・外交の経費である。華南の東甌・両越を手始めとして、農耕漢民族の宿痾とも言うべき北方の遊牧民族匈奴をターゲットとしての連年の軍隊派遣、輜重の調達・輸送、論功行賞、占領地経営、捕虜優待などが財政上大きな負担となった事が明らかである。軍事費に次いで、灌漑・治水および開墾等の経費である。これらは中央集権的な専制支配体制の経済的基盤として重視されたわけである。外交・軍事費、開墾・治水費以外では、園池宮殿の造営費、郡国巡幸・祭祀費、それに国家機構費・元首費・財務費等の経常的支出があげられる。

問題はこれらの国庫支出の財源である。

### I 国家財政（大農所管）の歳入面は概ね次の3項から成る。

#### 1) 租税収入 田 租（農業、収穫の1/30）

算 賦（人頭税、15～56歳 年120銭、3～14歳 3銭）

更 賦（国境警備戍卒免除の代償）

算 緡（所得税、商・工業者に重点）輶車・船舶・馬牛羊にも課税

#### 2) 特典収入 売爵・売官・贖罪等の収入

#### 3) 官業収入 塩鉄専売益金、酒榷・均輸・平準等の収入

Ⅱ 帝室財政（少府・水衡所管）の歳入面は概ね次の4項から成る。

- 1) 租税収入 山川税（林・鉦・水産）、園池税（果樹・蔬菜）、  
市井税（商業）、口 賦（3～14歳 20錢）
- 2) 造幣収入 貨幣鑄造益金、貨幣發行益金
- 3) 官有財産収入 苑囿池禦收入、公田小作料
- 4) 雑収入 献物収入、酎金収入等

国家・帝室の財政収入は、第一義的に租税収入に依存するのが常である。納税義務者の担税力を考慮して、ムリのない租税体系が策定せられる。国庫支出の増大、とくに軍事支出が増大し、次第に戦時統制経済の様相を濃くしてくると、税率が極限にまで高められ、違反者の告発を奨励する「告緡」政策が猛威を奮うようになり<sup>2)</sup>、ついには財源枯渇の淵に追いつめることとなる。第2段階においては、特典収入とか造幣収入・雑収入等に着目し、歳入確保の為には手段を選ばぬ仕儀となる。然し、それらは軍国の巨大な出費を充たすには余りに些少である。かくして、第3段階に至って採用されたのが官業収入策である。

官業収入は大別して2種に分けられる。

その1は、塩・鉄・酒の専売益である。いずれも大衆消費の対象であり、必需品的性格の強いものである。これらの商品の製造・販売の事業を国家の手に取り上げ、その営業収益を国庫に入れるのであるから、専売収益は莫大である。勿論、その反面、国民大衆が被った損害もまた莫大である。消費者の欲求を無視して生産された官業製品を、高価格で買うことを余儀なくされたわけで、その被害は堪え難いまでに至る。後世、〈塩鉄論争〉が実現し、『塩鉄論』が今に伝わる所以である。

その2は、流通国営の収益である。「均輸」・「平準」なる官署を開設し、天下の重要商品の流通を官営に移す。時間的・空間的に安価なれば買い上げ、高価ならば売り捌く。従来の商業者の機能を官に取り上げ、その利潤を国庫に収めるのである。財政収入確保の目的達成には効果的であっても、消費者の利益は犠牲になり、日常生活の破壊につながる事となる。漢書所載の塩

鉄論争の記事を引用しておく。

昭帝、位に即きて六年、郡国に詔して賢良文学の士を挙げ、問うに民の疾苦する所、教化の要を以ってす。皆な対う。「願はくは塩鉄・酒榷・均輸の官を罷め、天下と利を争うことなからんことを。視<sup>しめ</sup>すに儉節を以ってして然る後、教化興すべし」と。

弘羊難じておもえらく、「此れ国家の大業、四夷を制し、辺を安んじ、用を足す所以の本にして、廃すべからざるなり」と。すなわち丞相千秋と共に奏して酒酤を罷む。(加藤繁訳註「史記平準書・漢書食貨志」)

### 3 ま と め

『史記』の〈伝〉は、市場経済体制のもとでの国民生活の充実ぶりを集約した観がある。

これに対し〈書〉には、貨幣政策、抑商的財政政策を中心に、国民の経済生活の転変を記載している。

司馬遷は『史記』130巻の中に〈伝〉と〈書〉の2巻を対置し、市場経済の発展と、戦時体制下における其の変貌とを、歴史的事実として記録にとどめ、後世人をして観覧することを得しめるよすがとしたもの、と私は考える。

#### 注

##### 1) 『史記』「貨殖列伝」

老子曰く「至治の極は、隣国相い望み鶏狗の声相い聞こゆ。民各々其の食を甘しとし、其の俗に安んじ、其の業を楽しみ、老死に至るまで相い往来せず」と。必ず此れを用って務と為し、輒近の世に民の耳目を塗せんとすれば、則ちほとんど行わるることを莫からん。

##### 2) 「告緡」政策の実施状況(出所；〈書〉)

民の財物を得ること億を以って数え、奴婢は千万を以って数え、田は大県には数百頃、小県には百余頃、宅も亦たかくの如し、是に於いて商賈中家以上大率破る。民、偷<sup>とう</sup>して食を甘くし、衣を好くし、蓄蔵の産業を事とせず。

##### 3) 塩鉄専売の弊害の指摘(出所；〈書〉)

郡国多くは県官の塩鉄を作ること便とせず。鉄器苦悪にして買<sup>あたい</sup>貴く、或は強<sup>し</sup>いて民をして之を売買せしむ。